

1、はじめに：近代日本の西欧文明受容の典型－森有礼・森明・森有正－

今年度より変更される紙幣肖像の、福沢・新渡戸・夏目を比較研究することで、「学問」・「宗教」・「文学」を主な題材とした「近代日本の西欧文明受容史」が描ける。本テーマは、森有礼・森明・森有正という血縁の思想史であるが、それぞれ、福沢・新渡戸・夏目が担った性格を濃厚に有する。森有礼は福沢とともに、「明六社」等で、明治啓蒙思想を組織し、国民教育の大きな役割を担った、洋学系の学者・思想家という点で共通する。森明は新渡戸同様敬虔なクリスチャンでありながら、日本の国家のことも真剣に考えている。森有正はパリ留学で、漱石のロンドン留学の経験同様、西欧文明受容の不可能性に悩み、「現地地」という意味では漱石以上にこの問題を突きつめた。この三代が近代日本の西欧文明受容の典型と考えるゆえんである。

さらに、血縁であるので、それぞれの父子関係の葛藤軋轢というもうひとつの物語も描ける。今発表では、新渡戸の札幌農学校での同期である内村鑑三をめぐるの森家三代のキリスト教受容を考えてみたい。さて、伝記、評伝、大河小説と言う文学的手法でしか表現できない種類のテーマであり、学問研究の方法として確立していないために、大変困難で危険な道に入り込んでしまった感がある。本研究は直接には、佐野真一の『渋沢家三代』（文春新書、1998年）にインスパイアされたのだが、一つの模倣すべき規範を次に示したい。すなわち、学問としての「規律（ディシプリン）」がないという弱点の補強である。

トーマス・マンの小説『ブッデンブローク家の人びと－ある家族の没落－』は、西欧ブルジョワの四代かかっている、精神の先鋭化と、生命力の低下、さらにそこから脱却の可能性を象徴的に見事に描いた。そして、家族社会心理学者のマリアンネ・クリュリュは、大作『トーマス・マンと魔術師たち』で、マン家を素材に家族社会史の可能性を垣間見せてくれる。「私が、このトーマス・マン家のもう一つの物語によって注目してほしかったこと、それは私たちすべてが（・・・）おびただしい歴史を背負った家族に生まれたということである。私たちが私たちの家族の網の中のどこに、そしてどのように位置づけられているにせよ（・・・）私たちが私たちの歴史、私たちの家族の歴史の物語のある部分に責任を負っている。私たちはそれらの物語を回避できない宿命として受けとめる必要はない。むしろ自分でもそれを新たに物語り、新たな記述に寄与できるのだから」<sup>1)</sup>特に、森家の場合、漱石が批判したような欠点を三代かかって乗り越えてきたような性格を持つ。特に、比較文学・文化の芳賀徹が「家系内・家庭内での西洋経験の感化と継承ということも、雰囲気的なものであるから把握しにくいが、きわめて重要である」<sup>2)</sup>というように、そうでない家系との差は大きいといわねばならない。いってみれば、「雰囲気的なもの」を合理的に把握しようとする。大衆レベルでは、海外旅行・出張・留学また、逆に外国人との国内での接触等があたりまえになってきている。しかし、それは、ほんの一世代、二世代のことに過ぎないのではないだろうか。このように考えると、森家三代のことを考えることはわれわれや次世代のことを考えることにつながろう。さらに、日本と同様に良くも悪くも西欧文明の摂取の問題を抱えている他の国々・地域にも参考になるのではないか。

## 2、森 明の父有礼に対する葛藤

### (1)近代天皇制とキリスト教—天皇の「肖像」の問題から—

紙幣の「肖像」という事に関して言うと、なぜ、「天皇」の肖像が使われなかったのかという問題に当然行き当たる事になる。立憲君主国では、当然のごとく君主が紙幣・硬貨の肖像として使われたのである。ところが、明治天皇の写真嫌いもあってか、天皇の「肖像」は奇妙な使われ方をしていくことになる。すなわち、その後、「教育勅語」とともに日本の諸学校で天皇制国家イデオロギーの暴力的装置として使用される事になる「御真影」である。

近年注目を集めてきた、天皇の巡幸、行幸啓との関係、「御真影」による「視覚の支配」について簡単に述べておきたい。明治期、天皇の存在を知らしめるために、前半期天皇は全国を巡幸する。そして、後半期からは、天皇を国民に見せることから、逆に「御真影」によって国民は天皇の視線にさらされ、権力的に支配される。おもしろいのは、「御真影」がキヨソーネの「肖像画」を「接写」したものである、ということだ。天皇が国民の前でその存在を誇示しなくても、「写真」の威力で国民を支配できるという近代的な権力支配の方法の変化は興味深い。原武史は、明治後半以降も、後の大正天皇、昭和天皇らが広範な行幸啓を行っている事実を指摘しているが、「行幸啓」と「御真影」の両方が威力を発揮していたことは間違いない。<sup>3)</sup>そして、森有礼はこうした戦略に大きく関与していた。<sup>4)</sup>従って、森を天皇制国家主義者の権化のように批判する立場も根強い。しかし、時は 1880 年代。世界的な「近代国民国家」成立期であって、いわゆる「民主的」、「共和的」な国家も、同様に「伝統の創出」(ホブスボウム)を行い、国民統合のための象徴的な文化支配を公立学校をも通じて強烈に行っている。たとえば、ライシテ(世俗化)の流れの中で、フランスは「三色旗、ラ・マルセイエーズ、マリアンヌ像、自由の木、理性の神」などで文化支配を行っている。いってみれば、「理性」が宗教にまでなっているわけだ。<sup>5)</sup>大胆に言えば、森の場合、日本と言う国民国家を立ち上げるために、「御真影」が「マリアンヌ像」であってもよかったわけだ。実際、「森自身も、ひそかに家庭でのくつろぎの中で、『実は天皇はいらんのだ』と呟いたというが(森有剛氏談)、さもありなんと思わせる」。<sup>6)</sup>という証言は、プラグマティックな天皇利用と言うことを裏づけていよう。しかし、彼の死と、その後の情勢により、「御真影」の価値は暴走を始める。「国民国家は新しい宗教だ。それを明治の指導者が知っていたかどうか。日本は、国民国家を作るに当たって、天皇制神道という古代宗教まがいの新宗教を創った」<sup>7)</sup>が、森有礼はその威力を意識していたのだと思う。ここで、関連して次のような仮説を筆者は考えている。教育学を中心に、「森有礼問題」といってもよい問題がある。「国家主義者か、自由主義者か」、「クリスチャンかそうでないか」という相矛盾する要素である。いくつかの優れた統一的見解がこれまでも出されてきたが、決定打とはなっていない。<sup>8)</sup>フランスの国家祭典に関して言うと、ロベスピエールをまず思い浮かべるが、その思想的源泉にルソーがある。これまでルソーと森有礼の関連についての考察は管見ではほとんどないが、中江兆民の『民約論』を森が読んでいる可能性もあり、十分考察に値すると考えられる。例えば、ハリスの共同体は『新エロイズ』の「クラランの共同体」、森の考える「国家」は「一般意思」でないのか。『社会契約論』の「国家宗教」、『ポーランド統治論』の国家儀式、祭典を利用した国民形成は、森の儀式を利用した国民国家の「主体(臣民)=subject」作りに酷似している。たとえ、無理な比較論考であったとしても、少なくとも「ルソー問題」を考える方法論は、「森有礼問題」を考える大きな手段となる。<sup>9)</sup>

## (2) 森明のキリスト教入信時と父・有礼との関係

山口昌男は井上ひさしとの対談で次のように森家3代を「敵討ち派」、「西欧に囚われた一族親子」としてまとめている。「明治憲法発布のときに殺された森有礼(文相)の一族が敵討ち派かな。森有礼は明六社以来の徹底した西欧主義者でしょう。アメリカに駐在したときに、留学生を集めて『このまま日本語を使っている日本人は劣化する、ゆくゆくは英語にしなきゃダメだ。きみたち頑張ってくれ。しかしそれだけでも不十分で、血を良くしなきゃいけないから、君たちはできるだけ白人の女性と結婚する努力をして、日本人の血を向上させろ』と訓示したというんですね(笑)。それで彼は大日本帝国憲法発布の日にナショナリストの西野文太郎に暗殺されてしまう。西野の、これは息子ではなく孫が岩波新書なんかで本を出しているアフリカ学者の西野照太郎です。それで森有礼の倅の森明は、全然官に就かず、教会の中で学者になって比較的若くして死にましたが、キリスト教精神史でいい仕事をした。それから孫の森有正はデカルトなどの研究で有名な西欧思想研究家で、パイプオルガンも弾きましたが、東大助教授のときにフランスに留学して、そのままもう帰ってこなくて、パリで死にました。西欧に囚われた一族親子ですね」<sup>10)</sup>森有礼の留学生への訓示は、金子堅太郎の回想を出典としていると考えられるが、こうした発言内容に対しては、その真意が疑問視されている。<sup>11)</sup>しかし、西欧文明に大きな影響を受けた一族であるという大枠は有効な評価であろう。ただし、彼らの「国土的」とも思える国家への関心・態度についての評価は抜け落ちているといわねばならない。

森明は生まれながら病弱ということもあり、ほとんど学校にも行けず(学習院初等科を1, 2年のみ)、ほとんどを独学で済ませた。とはいっても、家庭教師は旧制一高の名物ドイツ語教師になる岩元禎(漱石の『三四郎』の広田先生のモデル)という豪華さではあるが。有礼と関連した宣教師、ミューラーの紹介から、キリスト教に入信する。このことは彼にとって父親との関係で非常にデリケートな問題を投げかけていた。次の(ア)の場合も(イ)の場合も明にとって、父は許しがたい部分をもっていた。

- ① **森有礼の暗殺** 初代文相森有礼は明治憲法発布の朝(1889.2.11.)暗殺されるが、暗殺された理由の趣旨が伊勢神宮での不敬事件であり(デマ)、彼がもともとキリスト教信者であったといううわさが狂信的国粹主義者を刺激したのである。生まれながらの父無し児となった明がキリスト教に入信することを親類縁者は止めるが、結局は岩倉具視の娘であった母ともども植村正久を仲介に入信し、牧師への道を歩む。
- ② **内村鑑三不敬事件** 明治憲法発布の2年後、内村鑑三は一高教授時代に、不敬事件を起こす。この前年布告された「教育勅語」を読む儀式で、拝礼をしなかったために、キリスト者内村は辞職し、妻は死に追い込まれていく。森有礼がレールを引いた、天皇制を利用した行事によって、信教の自由は大きく侵害されたのである。現代の「日の丸」・「君が代」問題の原型である。<sup>12)</sup>森明の師である植村は、偶像崇拜の観点から「御真影」に反発している。<sup>13)</sup>ただし、こうした天皇制崇拜儀式が実は、キリスト教のそれをモデルにしていたという教育史学の成果がある。<sup>14)</sup>したがって、内村のこだわりはキリスト教の拝礼形式への拒否という皮肉な結果とも考えられる。さらに、森有礼自身の中では、信仰の自由と「御真影」の問題は別問題として峻別されていたとも考えうる。<sup>15)</sup>

森明は①、②どちらの場合も、キリスト教徒として、父親は大きな障害であった。

### 3、森有礼とキリスト教の接点

#### (1) 森有礼とキリスト教の関係

森有礼がキリスト教徒であったかどうかは議論の分かれるところである。たとえば、森有礼を擁護する場合、妻森寛子のように自分がクリスチャンであれば（ア）のように、森はクリスチャンであったと証言する。黒田清隆や井上毅のように自分が明治国家の機構に組み込まれていれば、（イ）のように森の国家主義教育を強調する事になる。福沢の場合、開明的な自分と同様の森の資質を擁護する事になる。

すなわち、森の場合、研究者を含めて「論じる者自身」の思想や考え方の「リトマス紙」の役割をする。したがって、「森有礼がキリスト教徒であったかどうか」よりも、様々な要素をもった多元的な価値観を体現していたと言う事にむしろ興味を持つべきであろう。

#### (2) ハリスのコロニーでの経験

幕末の薩摩藩密航留学生の一人として、イギリスに渡った森はアメリカの T.H.ハリスのコロニーですごす事になる。林竹二の一連の研究から、この時代の森のことに注目があたってきた。このキリスト教団は 18 世紀の神秘主義者スウェーデンボルグの影響を受けており、スウェーデンボルグに対する関心からも様々なアプローチがなされている。日本との関係では鈴木大拙が紹介したことが有名であるが、近年では「森-新井奥達-田中正造」のラインでの影響も研究されている。<sup>16)</sup>さらに、高橋和夫を中心に正統で緻密な研究もなされている。<sup>17)</sup>面白いのは、森有正との関係で言うと、彼の身近であったバルザックやリルケがスウェーデンボルグの影響を受けていることである。それ自体興味深いが、本論とずれるので詳しく論じない。

#### (3) 明治のキリスト教への森有礼の関与

森は日本では、自分自身はキリスト教への関与が大きくないが、多くのクリスチャンの活動を助けている。<sup>18)</sup>

- ・ 津田梅子（津田塾の創始者）・・・アメリカ留学のときに世話をする。
- ・ 横井小楠・・・森たちのハリスの話に大きな関心を受ける。その後小楠はクリスチャンであるとして暗殺される。アメリカ留学中の甥の横井大平に影響を与える。
- ・ 新島襄（同志社英学校の創始者）・・・アメリカ密航の免罪をする（森有礼自身、幕末密航者）。
- ・ クラーク（札幌農学校教師）・・・留学生をマサチューッツ農科大学に預ける。

特に、アメリカ公使時代は、多くの留学生の世話やアメリカ知識人層とのかかわりのなかで、「文化外交」を行い、西欧文明受容だけでなく日本文化の大きな発信源でもあった。アメリカのキリスト教改革運動にも影響をあたえている。<sup>19)</sup>また、明六社内においても、中村正直、津田仙等のキリスト者がいる。森自身がはっきりとキリスト者への意思表示をすることはしないものの、大きなシンパシーを持っていたことは確実である。さらに、「宣教師の目的というか使命は、日本をキリスト教国にすることだった。森有礼、田中不二麿など洋学派と宣教師の間には網の目のようなつながりがあった」。<sup>20)</sup>

このように、森がクリスチャンに限りなく近い位置にいたことは多くの証拠として確認しうる。しかし、いわばこれらは状況証拠として考えられ、直接的証拠・物的証拠としては、ハリスの教団を去る時のあいさつ、畏友鮫島への弔辞ぐらいであり、説得力に欠ける。さらに、李鴻章との対談でははっきりとクリスチャンでないことを言明している。<sup>21)</sup>

#### (4) 「日本における宗教の自由」(原文英文: *Religious Freedom in Japan*)

森がクリスチャンであった、あるいは、クリスチャンの精神的基盤を有していた直接的証拠・物的証拠のうち、もっとも注目すべき資料がこの論文である。ここでは、その成立事情及び内容について分析を加える。

##### ① 吉野作造による発見(1928年、『明治文化全集』宗教編)

この資料は、森がアメリカ公使時代のものであり、森初の論文であり、森の自由主義的性格・開明的性格を証拠付けるものとして、注目されてきた。特に、森明との関連で関心ももつのは、この埋もれていた資料が吉野作造の明治文化全集で大きく取り上げられたことである。一部は翻訳で出版されていたが、原文を掘り起こしたのが吉野作造である。森明と吉野作造は森明が帝国大学に作った「共助会」を通じての関係であり、吉野のキリスト教徒としての部分においても注目できる。さて、森明の死後ではあるが、吉野が森有礼の資料に注目したことで、父有礼への疑念を振り払う事になる。つまり、吉野の森明への友情によって、有礼の名誉復権に役立ったとも考えられるのである。吉野は解説で「正面から堂々と改革すべき要点を明示して、はじめからわれの非を飾らないところに森の面目が現われておもしろい。こんな男らしい態度は今日でも一部の人には嫌われる。あのころ森が売国奴のように誤解されたことは、あやしむに足らない」<sup>22)</sup>と述べた。森有礼に対しては、石井研堂の『明治事物起原』でも、重視されている。<sup>23)</sup>

山口昌男の次のような吉野評価は、森有礼に注目するかの大きな視点を与える。「吉野は、貶められたものに対する強い共感を持っていた」。<sup>24)</sup>また、明治史への視点としては、「吉野は維新後20年ぐらい、天皇側は国内をほとんど掌握していなかったと説き、負けた諸藩も黙っていないはずであると力説している。吉野の視点は、政治的にも蔭に置かれたものの復権が、民主(本)主義の気分的前提にあることを示唆している」。<sup>25)</sup>明治前期の混沌としていた政治・文化状況に近年注目が集まっているのも、こうした混沌とした日本の歴史から多くの可能性や、知られざる歴史像を探りたいという関心の現われといってよい。また、このような時期に大きな役割を果たした森有礼への強い関心も、混沌とした現代の関心からの必然とも言えよう。

##### ② 本当の作者は？

久野明子によると、大山捨松(津田梅子第1回女子留学生の一人、大山巖夫人)が預けられた、ベーコン牧師が、森から「日本における宗教の自由」の手直しを頼まれ、森は大きく変えられたベーコン牧師の案を採用した、というのである。<sup>26)</sup>剽窃といってもよいこの事実が、実際はどうかはわからないが、森が内容に大きく同意したことは間違いない。結局、明治政府によるキリスト教普及が解禁され、この論文は地下に潜るが、森の思想的基盤を知る上では大きな意味を持つ。

##### ③ 論文の内容

「人間にかかわる多くの重要な問題のうち、宗教の尊重は最も必要不可欠(vital)なもののように思われる。地球上のすべての文明国では、良心の自由、わけても宗教的信条に関しては、生得権としてだけでなく、すべての人間的諸権利(human interests)を発達させる最も基本的な要素としても不可侵のものとして(sacredly)みなされている。

奇妙で嘆かわしくも、われわれの聡明な民族の長く名誉あるすべての歴史において、この不可侵の権利がどのような形態においても、承認された痕跡が見当たらない。私たちが、現在見守っているすばらしい進歩をしている間にも、今のところ私たちの国民はこの重要な問題を考慮する

ことに、まだ熱心でも綿密でないことは、さらに驚くべきことだ。

(…) 生きとし生ける全ての者は、彼自身単独で、創造主（神）にその思想と行動の責任を負う。この責任の理解、さらにそれを果たす自由を奪われた者は、その言葉の本当の意味での人間とは、もはや正しく呼ばれることはできない。アメリカ政府によって新しい宗教や教えを作るといような考え（現在、わが国で流行っているような考え）は、理性の光に照らして奇妙な出来事である。宗教は誰に対しても売られることも、強要されることもない。要するに、われわれは各自独立して、信仰の幸福な生活や真実への洞察を教授できるということは、宗教の光明という内面的な考えによれば、良識ある存在としての人間の務めである。私たちの精神的・道徳的な言葉に存在する、無尽蔵ともいえる多様性の中には、よく似た美しさが存在する。さまざまな宗教的信仰を列挙すると、人間精神に現れうる最も興味深く教訓的な壮観となる。(…)

誰も、他人のために、宗教の良し悪しを決定しようとすることは、他人の権利に対する重大な暴力的罪を犯さざるを得ないだろう。また、どんな政府もこのような活動をすれば、神聖な職務にたいして一つの罪を犯さざるを得ない。国民の固有の権利において、人々を守ることは、政府が負う多くのゆゆしき責任のうちでも最重要のものの一つである。良心という生得権を破壊することは、政府が樹立される理由の一つなどではない。(…)

二つ目の反対論は、キリスト教の導入によってわれわれの社会関係に不和 (discord) を引き起こすという不必要な恐れである。革命なき進歩はありえない。社会の不和はしばしば祝福である。したがって、問題は、予期される不和が破壊の不和となるか、それとも祝福の不和となるかということである。答えは、社会的・政治的に、はっきりと祝福を与えるものとなるであろう、ということ以外のものではない。なぜならば、新知識を付け加えられ、キリスト教の倫理や信仰の特質の力を与えられる社会は、より賢明にかつ堅固になることで、必然的にその状況がより良くなるであろう。これは単なることばではない。地球上の国々の歴史に示されるように、その宗教がキリスト教である国々ほど先端文明に広く達している国々はない、というのは事実である。しかしながら、一時的には、次のような有害で恐ろしいことが現われるかもしれない。社会の発展や政治的な進歩という本当の哲学をよりよく獲得する度合いに応じて、そのような国家の利益のしるしによって、おそかれはやかれ、反対者にその採用へと慣らす。宗教は、全く個人的な信仰であるので、たとえだれかが心の中にどんな信仰を大切にしようとも、だれもまたどの政府もあえてそれを拒絶する権威をもとうとはしない」。<sup>27)</sup>

「革命なき進歩はありえない」は、西欧市民革命を指すことは間違いないが、日本においては明治維新の文化革命をも志向している。明らかにキリスト教の用語である「創造主」を使うなど、キリスト教の影響が色濃く出ている。この後、基本的人権としての良心・信仰の自由のためには、法体系の整備とともに、教育の重要性を説く。さらに、政教分離のみでなく、教育への宗教の不関与（中立性）を主張する。さらに、教育の私事性の原理（ジェームズ・ミル、J.S.ミル、スペンサーらと考えられる）を紹介しているが、後の文政期の国家主義的教育との差が現われる。

#### ④解決しきれない、「信仰の自由」と「御真影」

森有礼はキリスト教・国家神道を含め、あらゆる宗教の「国教化」の動きには反対の立場であり、文相時代も道徳的価値観の直接的注入には反対の立場であった。この点では、一貫しているが、「信仰の自由」と「御真影」の問題については、解決できない問題が残る。

#### 4、内村鑑三の「無教会主義」と森明のキリスト教受容

##### (1)内村鑑三の「無教会主義」

森明の死去に伴い、彼が中心になって計画していた第一回学生大連合礼拝において、内村鑑三が礼拝式の指導者となる。内村は指導者の養成に対し、「うむ、森君の弔い合戦か。よし、やろう」<sup>28)</sup>といったという。内村の盟友、植村正久の門下であるので、当然とも言えるかもしれないが、内村の不敬事件の遠因が森有礼にあることを考えると興味深く、その内容が「礼拝式」というのもどこか象徴的だ。ちなみに、森有正はこのとき初めて内村を見ることになった。そのことを記したエッセーで森有正は次のように述べている。「かれの積極的な貢献は日本に無協会キリスト教という新しい形態のキリスト教を形成したことであった。これは単に従来の教會的なキリスト教に対する反動ではない。かれの人間の誠実さがキリスト教の持つ内的現実に触れて、期せずしてここに未だ欧米にその類型を見ない形態が刻み出されたのである」。<sup>29)</sup>こうした、キリスト教の根本に起源を求めた内村の方法がアメリカの社会に対する批判を生みえたというのである。

膨大な内村の著作にすべてあたることは不可能であったが、そのキリスト教受容の独創的な諸相については推し量ることができる。特に、アメリカのキリスト教の現状に対して、内村の考えるキリスト教からの墮落をみとめ、日本的なキリスト教受容こそキリスト教の核心となりうるといった独創を見ることができる。儒教道徳における身分の閉鎖的性格を批判しつつ、こうした考えは、T.H.ハリスが日本に対して、キリスト教の理想を求めたこととも志向性を同じくする。つまり、ヴェーバーが考察したようにプロテスタンティズムの「禁欲」的性格が、しだいに、「金欲」へと雪崩れ打っていくアメリカの状況<sup>30)</sup>に対して、「武士道」をはじめとした日本あるいは東洋の道徳倫理にキリスト教の倫理的基盤を見たといつてよい。さらに、安丸良夫が定着した、庶民の通俗道徳の中にもこうした禁欲的倫理的基盤を見出すことも可能であろう。<sup>31)</sup>中村博武は、こうした内村の態度にオリエンタリズム批判の目を指摘する。「『文明の宗教としての西洋キリスト教の独善性』に対する痛烈な反駁であり、自己の成育した文化的伝統を捨棄したキリスト教受容への批判である」。<sup>32)</sup>「内村がその理想とするキリスト教に準拠して英国人と同等の立場にたち、その文化的優越意識に異議を唱えたことは、当時のキリスト教に基づく西洋文明優位の固定観念への挑戦であった」。<sup>33)</sup>さらに、萬朝報英文欄の記事を引用し、「『英国はアヘン貿易を押しつけるというような悪魔的で無慈悲な非キリスト教的側面がある』」<sup>34)</sup>という実に正当な内容を、正々堂々と訴えることができた。

このような内村の資質は、『余は如何にして基督教徒となりしか』以来一貫した部分でもあるが、国民性の強調は、天皇制国家主義に対する後発のキリスト教徒の弱点をも準備したともいえる。

##### (2)森明のキリスト教理解と日本人移民排斥運動

森明は、キリスト教と文化・科学との関係について考え続けたが、主に依拠したのはリッケルトなどの新カント派の哲学であったようだ。理想的なキリスト教を志向するというラディカルさは、内村と共通するものをもっている。一つは、森明の時代の社会問題からいえば、第1次世界大戦とアメリカの日本人移民排斥運動への抗議が注目される。もう一つは、キリスト教と科学・文化の関係である。ここでは、前者に焦点をあてることとする。

森明の晩年の課題は次のようなものであった。「勿論私達は神の恩寵に據って引出されたる、基督に於ける客観的真理の確信に、生きるものであることは言ふまでも無いが、其の因つて来る理

由を、学問の上に立證したいと思ふ。而してそれが、文化意識の據る真理の自覚と、如何に交渉し相触発するであろうか。若し此の根本的問題に於ける両者の『関係』とそれが示す『真理性』とが闡明せらるるであろうならば、現下の日本、更に世界の思想界は、非常なる変化を生じ、特に基督教の光輝ある立証となるであろう」。<sup>35)</sup>このようなことが学問的に立證できるとは到底考えられない。しかし、あえて、その無理なことに挑戦しようとし、「現下の日本、更に世界の思想界」へも大きな影響を与えることのできる研究を行おうとした壮大な意気込みは買いたい気がする。彼の主著『宗教に対する科学および哲学』はそうした試みの一つである。「宗教に学的基礎を求むる余の友の幾人かの余に語つた言葉を思ひ出した、それは宗教其物の真理の証明よりも、科学より、或は哲学より、宗教に迄至る誤り無い道程を知り得たいと言ふのである。之等の道が明らかになるならば信仰に対する吾人の確信の半以上は達成せられたと言つてもよい様に思はれるとも言ふのであつた」。<sup>36)</sup>普通の感覚では、何という無駄な努力かと考えるであろう。しかし、たとえ、その目的が達成できなかつたにせよ、西欧文明の思想・科学を深く知るといふ大きな副産物がもたらせるはずだ。ちょうど、ニュートンが「神の手に触れたい」と願つて『プリンピキア』を完成させたように、学問への動機付けとしての部分では大きな有効性を示している。森有正の『近代精神とキリスト教』、『ドストエフスキー覚書』、パスカル研究などの系譜は森明の『宗教に対する科学および哲学』のテーマの深化とも考える。

このような、「キリスト教原理主義」といってもよい、根源的な問題意識から、森明は内村鑑三同様、西欧文明の中にある堕落した部分も批判していく。「宗教生活の充実」(1924(大正13)年初出)において、アメリカの日系移民排斥への異議申し立てをする。まず、「海洋の自由、土地開放の要求は人道上必然の真理性を指示している」<sup>37)</sup>という原則を示す。そして、ダーヴィニズム、スペンサーの社会進化論の、より洗練された解釈を内村鑑三を引用して示す。「内村鑑三氏は最近『聖書之研究』紙上に於て『世界はアングロサクソン民族に属せず、又米大陸は米国人に属せず。同地は神の有であつて、神が与へたまふ民に属す。人間の政府に由て制定させられたる如何なる法律も、其政府は如何に強大なるものなりと雖も、他の所有権に關はるこの根本的法則を変更することは出来ない。義者は義を嗣ぐべし、不義者は其所有を奪はるべし。若し世界歴史が明白なる一事を教ゆるならば、この一事を教ゆる……』とこれ実に聖書に表明させられたる真理とは言ひながら、鋭き史眼といはざるを得ない。この意味に於て適者生存である」。<sup>38)</sup>そして、次のようにアメリカを告発する。「単に土地問題だけであるならば、日本人は天下何れの地に到るも排斥さる可き理由がないのに拘わらず、米国は土地所有権を日本人から取り上げるのみならず、その入国移住をも突如として自分勝手に禁止して了つた。(…)又米国の土地は米国人のものだから自分達の勝手だと言ふであろうが、然し米国民は如何にして如何なる手続を経て其国土を獲得したであろうか、彼らもまた等しく移民民ではないか」<sup>39)</sup>という、先住民排除の歴史を「独立宣言」の建前からの落差として鋭く指摘する。

「米国の如く広大なる土地を有する国は、日本の如く人口過剰に苦しむ国民に対して国際道徳上、土地を融通すべき」<sup>40)</sup>という考え方は、身勝手な考え方であるし、日本のその後の中国侵略への根本的な批判にはつながらない。むしろこの点では、石橋湛山の合理的な、人口過剰論批判が説得力をもつ。しかし、ラスキの「多元国家説」(実はウルトラ・ナショナリストと考えられていた高田保馬のほうが、「多元国家論」に関しては、ラスキより早く論じているのだが)にも言及し、「多

元的国家政策」、「多元的文化政策」を結論づけていることは、現在の「多文化主義」、「文化相対主義」の先取りだけでなく、当時の日本の植民地支配への批判にもなっているのである。「本国と植民地とは支配被支配に関係では無く、徹底的に地方分権的にして此處にも多元的国家政策に據る個別的全体性の統制が実行せられなければならない。それは植民地の自治に向つて本国は其自律性の助長を其政策の方針とせねばならない。植民地に対して、犠牲的であつて利己的野心を抱いてはならない、殊に日米間に於ける場合の如き米国に対する印章の要求をも期待してはならない。人口過剰に傾きつゝある日本国民は品質、能力に於て米国の土地を使用し得べき充分の資格を有している、只誤つたる愛国心と旧式なる単元的国家観念に止まるが故に、人類全体に亘る正当にして光輝ある民族発展の好機を逸しつつあるといふの他は無い。(・・・)日本固有の極めて崇高なる文化例えば『武士道』の如き、『忠孝』の精神『貞操』の観念の如き、若し之を個人的自覚を持つて發揮するを得ば米国に取つても無二の幸福である可き筈である。」<sup>41)</sup> 下線部はともすれば、キリスト教の考え方と相ぶつかる概念であるが、内村・植村・新渡部に共通する日本のキリスト者の特色を備えている。「日米の争議は相互に言分を有する。然れども相互に反省を要する」<sup>42)</sup>、という冷静な結論は、キリスト教というより高次の次元がなさせた業といつてよい。

### (3) 内村鑑三と森明のキリスト教受容の比較検討

キリスト教教義に疎い筆者の、このようなキリスト教受容の比較検討が有効かどうかは大いに疑問だが、その受容の仕方の外面的な比較検討に限定して考えたい。特に、ここでは共通点を恣意的に強調する。根本は、「人間」にとってのキリスト教であり、セクト主義、宗派にこだわらない根源的なキリスト教理解に努めた、ということである。さまざまな排斥を受けた内村、常に死と隣り合わせであった、しかも、父有礼の汚名さえうけていた森明、というギリギリの状況が、強いキリスト教信仰につながり、西欧文明の本場への正当な批判もできたと考える。森明の純粹さ、ラディカルさから考えて、昭和前半期のファシズム化の進む日本のその後の状況を考えると、その早い死はある意味で幸福であったかもしれない。

## 5、森有正の『内村鑑三』

### (1) 森有正とキリスト教

森明のキリスト教入信は、森家のタブーを破る命がけの自分の決断であったが、森有正の場合は自ら述べているように、家庭の習慣として自然に身につけたものであった。森有正と同じ船でフランスへ留学した遠藤周作も同じ様な問題を抱えていたが、森有正の場合はキリスト教の問題が、遠藤ほどの切羽詰った問題とはなっていない。年齢の違いや、カトリックとプロテスタントの違いがあるかもしれない。「キリスト教はその本質において信仰であり、従つて愚かなるものである。しかしこの愚かの上にかの輝かしい西欧文明の基礎の重要な部分がおかれてゐることを我々は忘れてはならない」、<sup>43)</sup> というように、森有正の場合あくまでも西欧文明の基礎としてのキリスト教に関心の中心があつたと考えてよい。

### (2) 森有正著『内村鑑三』<sup>44)</sup>の分析

#### ① 不敬事件に関する記述

この著作は、小さな本（文庫版で 78 頁）で、晩年には本格的な著作も考えていたようであるが、特色ある内村鑑三論となっている。まず、本小論に関連しては、不敬事件をどのように記述

しているかである。森有礼のことは一切触れていない。事件の簡単な紹介の後次のように言う。「仏教や神道の神々から唯一の神によって解放された内村鑑三は、その神を裏切ることにはしない。重要なことは問題が、ほとんど瞬間的であったことである。かれは、あらかじめ考慮して、この行動をしたのではない。ただ神以外のものを断じて拝すまいとする瞬間的な良心の感覚のためであった。ここに、天皇神格化と、それに象徴される国家至上主義は、神を信ずる内村鑑三によって原理的に否定されたのである。しかし、彼はこの挙を、けっして勇氣凛々とやったのではない。かれは、じっさいはチョット頭を下げたのである。(…)

重要なことは、かれの良心が内側から神に束縛されて、拝することができなかつたのである。この事実はどう分析されるかは知らないが、かれはここで、自己の良心に従わざるをえなかつたのである。これは事実であった。一個の全人間を単位とする事実であった。唯一の神を信ずることが、彼をそこまで強制したのである。もしそれが神の罰を恐れてだとしたならば、彼は必ず礼拝したであろうと思う。そして、あとで種々の理由をつけて自己を正当化しようとしたと思う。

しかし、かれは意地を張ろうとしたのではない。校長から敬礼の趣旨を十分に聴取し、また同信の植村正久、金森通倫らと相談したのち、ふたたび敬礼しなおそうとさえしたのである。それは一に良心の問題であった。これをリゴリズムであるといつてはならない。それは、かれの神の信仰に立つ国家至上否定と同じ根源から出るのである。神から使命を授かるべき国家が、神として拝されてもよいものであろうか。これはあくまで厳密な問題であった。かれは校長からは、それが宗教的礼拝ではないことを説明された。しかし彼はそれだけでは満足せず、同信の友人の意見をきき、その上で、再び拝礼しなおそうとしたのである。校長の説明だけでは不十分であったことが重要である。かれは自己の良心を人に預けることはしなかつたのである。ここにかれは、国家権力そのものと、ただちに面を合わせて立つたのである。

かくしてかれは、爾後数年、国中身を置くところもなきにいたつたのである。その事件の直後、かれは愛する妻をうしなっている」<sup>45)</sup>

不敬事件をなぞるだけでなく、内村の内面を同じキリスト者の立場から読み取ろうとしていることがうかがわれる。

## ②内村評価と父・明の評価

小塩力(ドイツ文学者小塩節の父)は森有正との対談で次のように発言する。「話が少し飛びますけれども、ヨーロッパを見た目で、日本の現実を見ていただきたい。あの『内村鑑三』をお書きになったころ、同じような方向で植村正久をどこかでお話になりましたね。あれはやはりお書きになる気持ちがあつたと思うのです。おそらく、日本の教会あるいは日本の文化の中で、取り上げるに足る人物だと思ひます。先生の遺産を、今日の教会は、極めて小さい卑陋な形で受け取っています。植村正久とか、お父さんの森明とか、手塚縫蔵とかいう人は、教会の中に生きた人ですけれども、ある意味では、教会・無教会を超えて、本質的なものに触れた人だといつていいと思ひます」。

<sup>46)</sup>この発言から間接的にうかがえることは、内村鑑三を論ずることは、植村正久そして森明を論ずる事に大きくつながっているということである。つまり、森有正の『内村鑑三』は森明への挽歌・鎮魂歌とも取れるのである。

この対談集には、羽仁吉一・もと子との対談もあり、森明と自由学園の興味深いエピソードもあ

るが、次の発言は森有正のキリスト教観をよく表わしている。「キリストの十字架の深い意味がわからないと、社会改革の意味も本当に理解し批判することが出来ないのではないかと思います。従って進歩的なラディカルな思想に対しては、ごく乱暴に言えば現状維持が得策だという便宜的立場以上の点から批判を加えることが出来ないのです。そういう意味でわれわれはヨーロッパの思想を割引せずに、全体として学び知ることが必要ですが、例えそれを勉強することが出来ない人でも、自分自身の思想を深く誠実に突きつめてゆけば自然にそこまで到達出来るのではないかと思います」<sup>47)</sup> 西欧文明一般の理解にキリスト教の意味の重要性を指摘しており、筆者を含めキリスト教にたいする距離をおいた西欧思想等の受容に警告を発している。それは、クリスチャンになる、ならないという問題ではないことは言うまでもない。

### ③内村鑑三と森有正

キリスト教受容に関してのみならず、徹底した生き方、妥協しない態度、激烈ともいえる対象への打ち込み方など、すべての面での「激しさ」という点で両者の姿勢の共通点が見出される。森有正について、教え子の辻邦生は「内村鑑三のような迫力があつた」とエッセーで表現しているが、このような人間類型のエネルギーが、破壊的・暴力的なエネルギーに集中すればそろそろ怖い気もする。逆に言えば、こうした人間類型のむかうべき一つの様式を呈示しているとはいえないだろうか。こういう、人間類型はある意味で、自分の周りにいれば、そのエネルギーの渦中に巻き込まれるおそれもあるが、「こういう人間がいた」という事実だけでも、勇気付けられる存在であり、求めるべき「知識人」像の一つといえよう。

## 6、おわりに

森明の息子有正はフランス思想・文学を専門とした東大助教授であったが、やはり幼い時に父親を無くし、父へのやりきれない気持ちを抱いていた。森有正は、父の早い死によって、大きな変貌をする。「父は私が14歳の早春亡くなったが、この父の死は私に深く刻みつけられていると見えて、父は死んだ人間として夢には決して出て来なかった。真夜中にふと気がつくと、広い家の雨戸がまだどこも閉めてなく、それを閉める人は自分だけしかいないことを思って限りない恐怖の念に襲われるところで目が覚めて見ると、ちゃんと鍵をかけたバリのアパートにねているじぶんをみいだす、などということもあつた。(…) 私は、その時、タクシーの中で、その昔をなつかしい、と思っただけで、ほかに何の感想もなかった。昔と今との相違も、海外へ行った私が幼い日の自分とどう関係しているか、ということも、一切考えなかった。ただある時間が流れ去つた、ということだけをまざまざと感じ、それは、この場合、なつかしいという言葉で尽くすほかなかったように思われるのである。タクシーは瞬く間に、幡ヶ谷のほうに進んで行った。いま、ふり帰つて考えてみると、私の中にあるすべてのものは、すでにその昔にみな私の中にあつたようである。ただそこには、父が死んだあと、私を見る目が欠如していたように思われる。だからそれは時の流れとなり、なつかしきになるのであろう。父がずっと生きていたら、それはなつかしき、というようなものではありえなかつたような気がするし、また父の死を私が生まれる時まで押しやって、幼少年時代全体になつかしきを流れさせているような気もするのである。そしてそれは相当に強い私の生きる姿勢であつたように思われる。ある意味で、成人してからの私の生

活というのは、この消えうせた父の目が少しずつ再現し始め、生きるということが単なる時の流れではなくなる過程でもあったように思われるのである。しかしそういうことまではタクシーの中では考えなかった。つまり父の死は、私の中における経験の自覚を少なくとも 15 年おくらせたのである。私において、自分の経験の起源を問題にするならば、それはフランスへ渡ったことではなく、父の死をめぐる私の姿勢の中に求められなければならない、と思うのである。<sup>48)</sup>父親亡き後、母、祖母、妹との 4 人暮らしの中では、自然に一家の柱としての重責がのしかかってきたのである。「雨戸の夢」のエピソードはそのイメージを実に良く現わしている。良い意味でも、悪い意味でも、「父の目」というものがあれば、「拒否」であろうが「追認」、「尊敬」であろうが、息子にとっての生き方はたしかに異なろう。

『バビロンの流れのほとりにて』の著名なパラグラフで、彼のこうした決意表明を見ることができ。「考えてみると、僕はもう 30 年も前から旅に出ていたようだ。僕が 13 歳のとき、父が死んで東京の西郊にある墓地に葬られた。2 月の曇った寒い日だった。墓石には『M 家の墓』と刻んであって、その下にある石の室に骨壺を入れるようになっている。その頃はまだ現在のように木が茂っていなかった。僕は 1 週間ほどして、もう一度一人でそこに行った。人影もなく、鳥の鳴く声もきこえてこなかった。僕は墓の土を見ながら、僕もいつかはここに必ず入るのだということを感じた。そしてその日まで、ここに入るために決定的にここに帰ってくる日まで、ここから歩いていこうと思った。その日からもう 30 年、僕は歩いて来た。それをふりかえると、フランス文学をやったことも、今こうして遠く異郷に来てしまったことも、その長い道のりの部分として、あそこからであそこに還ってゆく道のりの途上の出来ごととして、同じ色の中に融けこんでしまうようだ。<sup>49)</sup>そして、森明も、幼き日に「森家の墓」を独り訪れている。「明は、旧友から『なんだ、君にはおとお様がないのか』、といわれたある日、学校の帰り道に一人で青山墓地にまわって、家でりっぱな父といい聞かされていても物言わぬ冷たい石でしかない父の墓に参った。墓前にランドセルをおろし、しょんぼり腰かけて時間を過ごして、『つまらないな』と、人生の虚しさを噛みしめたとする。この少年が、16 歳で『まことの父』が在すことを知らされて、がく然として人生を見なおすのである。<sup>50)</sup>

小学校 1、2 年生で「人生の虚しさ」が理解できたかどうかは別にして、なかなか、ドラマチックな場面である。それぞれ、不可抗力とはいいつつ父親への憤懣がこもっている。さらに興味深いことは、森有礼も父有恕との関係は微妙であるということだ。大臣になっても、自決した兄と比較されるなど、決して良好な関係とはいえなかったようだ。そして、三人に共通していることは、父親との葛藤に対して、母親にへの無条件の思慕の念である。このあたりが、フロイト流の精神分析の対象となる部分だが、ここでは保留しておく。

森有正の妹、関屋綾子は岩倉具視を含めて四代の家系の歴史を振り返りつつ、次のようにまとめる。「我が家の多くのものたちが、ただ様々な立場をとりながらキリストと出会った。この事実は、日本固有の縦社会に最も根強く生きながらも、その中から我が内なるキリストを接点として、全く異なった水平の社会への展開を果たすべく、一人一人が全力で戦ってきたこととも言える。それがいって見れば、わが家の本当の家系なのかもしれない。<sup>51)</sup>また、自分がフリーの仕事を選んだことに寄せて、「独りで立っていたい——そんな気持が根強く心の奥底に巣くっているのだ。考えて見るとこれが森家の家系かもしれない」、<sup>52)</sup>とも述べている。

これ以上付け加える言葉もないが、森家三代をキリスト教受容を軸に考察してきて、それぞれが、父親に抵抗しつつ、自然に同じような道を進んできたといつてよい。進んだ方向はそれぞれ別ではあるが、一身を賭けて、すなわち自分の心身を実験材料として投入し、高みに立とうとしたといえる。ある意味で「禁欲」的に、目標に向かって全的に打ち込むという特色が見られる。園田英弘は、森有礼の解釈にヴェーバーのテーゼを用い、次のように読み解く。『『目的合理性』も、教育に対する使命感の強い要求も、また専門家の重視や官僚制に対する過度の信頼なども森のキリスト教信仰と武士的禁欲主義が合体補強しあったところに生まれた、ウェーバー的意味での『世俗内禁欲』の産物と理解されるべきである。そうすることによってのみ、これら様々の主張を相互に親和的關係にあるものとみなすことができるのである』。<sup>53)</sup>森明も森有正にも、濃厚にこうした要素があるように思える。<sup>54)</sup>

安田寛は、明治の洋学導入において御雇外国人メーソンが果たした役割に注目し、メーソンが実は公教育を利用し、「唱歌」の中に「賛美歌」のメロディーを潜り込ませ一種の布教活動を行ったという、推理小説仕立ての論考を行った。そして、メーソンを日本に呼んだ張本人こそ実は森有礼その人であったのだという興味深い結論を導いている。森有礼が「唱歌」を利用して、「忠君愛国思想」を吹き込もうとした、という考え方への反証になっている。「彼こそは、まさに日本人が近代を生きのびるための身代わり選ばれて、十字架を背負った人物だった。『スイサイド・ミッション』ということばがある。『自殺行為』とでも訳せばいいのだろうか。彼が、文部省に入ることは、スイサイド・ミッション、自殺行為になることが予言されていたようなものだ』。<sup>55)</sup>森の国家主義的な側面を無視していると考えられるが、文相になったときの「自警」で次のように記していた事は、「自殺行為」を裏書している。「文部省ハ全國ノ教育學問ニ關スル行政ノ大權ヲ有シテ其任スル所ノ責随テ至重ナリ、(…)愈謀リ愈進メ終ニ以テ其職ニ死スルノ精神覺悟アルヲ要ス」。<sup>56)</sup>森有礼・明・有正は 3 人も、これからいよいよ仕事の仕上げをしていく大切な時期に亡くなっている。そして、「自殺行為」といってもよいような過酷な状況にわざわざ自ら追い込んでいるように見える。元々病弱な森明は、さまざまな活動を晩年にも行い、森有正は著作活動に並行してフランスで教えながら、ICU の客員教授、パリ日本館館長という激務をこなしていた。そもそもキリスト教と「自殺行為」という組み合わせそのものがおかしなものだが、この三人はこうした志向性を持っていたと考える。

最後に、仮説的考察を加えて終わりたい。森有礼の思想・行動的転機は、明治 12 年の「教育論—身体能力—」であるが、どのようにこうした思想転換がおこったかは解明されていない。筆者は、その前の中国（清）での外交官としての経験に注目している。また、森明は、伝道者としての道を、植村正久との上海伝道から始めている。森有正の晩年の日本への積極的なコミットは、中国の政治・文化の動きとの関係が大きいと考えられる。すなわち、西欧文明に大きく影響を受けてきたものが、いったん中国あるいはアジアの文物・思想に接触することで、それが大きな触媒となり、発火し、西欧文明をも相対化した独創的な思想行動の飛躍がおこるひとつのモデルとなっていると考える。「西欧—アジア—日本」という、三つの視点の有効さは、さまざまなレベルで参考になるものといえよう。

注

- 1) マリアンネ・クリュリュ、山下公子、三浦国安訳 (1997) 『トーマス・マンと魔術師たち－マナー家のもう一つの物語－』新曜社、459頁。傍点原文。
- 2) 芳賀徹 (1968) 『大君の使節－幕末日本人の西欧体験－』中公新書、226頁。下線不破。
- 3) 以下の興味深い論考を参照。原武史 (2001) 『視覚化された帝国－近代日本の行幸啓－』みすず書房。原武史 (2000) 『大正天皇』朝日新聞社。T. フジタニ、米山リサ訳 (1994) 『天皇のページェント－近代日本の歴史民族誌から－』NHKブックス。猪瀬直樹 (2002) 『ミカドの肖像 (日本の近代、猪瀬直樹著作集5)』小学館。多木浩二 (2002) 『天皇の肖像』岩波現代文庫。若桑みどり (2001) 『皇后の肖像－昭憲皇太后の表象と女性の国民化－』筑摩書房。木下直之 (2002) 『世の途中から隠されていること－近代日本の記憶－』晶文社。
- 4) 以下の実証的な研究を参照。佐藤秀夫 (1963) 「わが国小学校における祝日大祭日儀式の形成過程」『教育学研究』第30巻第3号。佐藤秀夫編 (1994) 『続・現代史資料8 (教育 御真影と教育勅語1)』みすず書房。籠谷次郎 (1994) 『近代日本における日本と国家の思想』阿吽社。山本信良・今野敏彦 (1973) 『近代日本の天皇制イデオロギー』新泉社。副田義也 (1997) 『教育勅語の社会史・ナショナリズムの創出と挫折』有信堂。
- 5) 谷川稔 (1997) 『十字架と三色旗－もう一つの近代フランス－』山川出版社、。
- 6) 上沼一郎 (1979) 「森有礼の教育思想とその背景」小西四郎・遠山茂樹編『明治国家の権力と思想』吉川弘文館、263頁。
- 7) なだいなだ (2002) 『神、この人間的なもの』岩波新書、130頁。
- 8) 参照：拙稿 (2002) 「森有礼における西欧文明の相対化に関する一考察－身体への着目を中心として－」『中部教育学会紀要』第2号、15～30頁。
- 9) 川合清隆 (2002) 『ルソーの啓蒙哲学－自然・社会・神－』名古屋大学出版会、91～113頁。
- 10) 山口昌男 (2000) 『敗者学のすすめ』平凡社、15頁。
- 11) 嘉本伊都子 (2001) 『国際結婚の誕生－＜文明国日本への道＞－』新曜社、182～183頁。
- 12) 「国旗・国歌の強制が最も危険であるのはそれを通じたイデオロギーの内面化－思想統制という点ではない。そういう意味での思想統制は簡単には実現しない。そうではなくて、具体的な実践場面において、ナショナルなシンボルへの非強調者がチェックされ、処罰や非難の対象として可視化されていくということである」(広田照幸 (2001) 『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会、377頁)。
- 13) 長谷川精一 (1999) 「森有礼の天皇観」『社会思想史研究』23、173頁。
- 14) 佐藤 (1994) 「解説」33～35頁。
- 15) 園田英弘 (1993) 『西洋化の構造－黒船・武士・国家－』思文閣出版、317頁。
- 16) 瀬上正仁 (2001) 『明治のスウェーデンボルグ－有礼・奥達・正造をつなぐもの』春風社。
- 17) 高橋和夫 (1997) 『スウェーデンボルグの宗教世界－原宗教の一万年史－』人文書院。
- 18) 瀬上 (2001) を中心にまとめた。
- 19) 塩崎智 (2001) 『アメリカ「知日派」の起原－明治の留学生交流譚』平凡社。
- 20) 安田寛 (1993) 『唱歌と十字架－明治洋楽事始－』音楽の友社、181頁。
- 21) 拙稿 (2002) を参照。22) 坂本盛秋 (1969) 『森有礼の思想』時事通信社、77頁。

- 23) 石井研堂 (1997) 『明治事物起原』全 8 巻、ちくま学芸文庫。
- 24) 山口昌男 (1995) 『「敗者」の精神史』岩波書店、364 頁。 25) 同上書、365 頁。
- 26) 久野明子 (1993) 『鹿鳴館の貴婦人 大山捨松—日本初の女子留学生—』中公文庫、108 頁。
- 27) 大久保利謙監修、上沼八郎・犬塚孝明編 (1998) 『新脩 森有禮全集』第 2 巻、文泉堂、67～80 頁。坂本盛秋の訳 (坂本 (1969) 62～76 頁) を参考に拙訳した。下線不破。
- 28) 清水二郎 (1975) 『森 明』日本基督教団出版局、265 頁。
- 29) 森有正 (1979) 「内村鑑三」『森有正全集』7、427 頁。なお、次節で扱う森有正『内村鑑三』は別の著作である。
- 30) 「営利の最も自由な地域であるアメリカが合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果、スポーツの性格を帯びることさえまればではない」(マックス・ヴェーバー、大塚久雄訳 (1989 年) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、366 頁)。
- 31) 安丸良夫 (1999) 『日本の近代化と民衆思想』平凡社ライブラリー。
- 32) 中村博武 (2000) 『宣教と受容—明治期キリスト教の基礎的研究—』思文閣出版、400 頁。
- 33) 同上書、401 頁。 34) 同上書、408 頁。
- 35) 森明「濤聲に和して」帝国大学学生基督教共助会編 (1932 年) 『森明選集』長崎書店、282 頁。以下、一部新字に変更。 36) 同上書、318～319 頁。 37) 同上書、166 頁。
- 38) 同上書、168～169 頁。 39) 同上書、170～171 頁。 40) 同上書、185 頁。
- 41) 同上書、190～191 頁。下線不破。 42) 同上書、193 頁。
- 43) 森有正 (1948) 『近代精神とキリスト教』河出書房、328 頁。
- 44) 森有正 (1976) 『内村鑑三』講談社学術文庫。 45) 同上書、32～34 頁。
- 46) 森有正・小塩力 (1982) 「ヨーロッパ文明の基底をなすもの」木下順二編『森有正対話編』I、筑摩書房、173～174 頁。
- 47) 羽仁吉一・もと子、森有正「学生層に見る思想の動き」、同上書、12 頁。
- 48) 森有正 (1999) 「遥かなノートル・ダム」二宮正之編『森有正エッセー集成』3、ちくま学芸文庫、91～93 頁。傍点原文。
- 49) 森有正 (1999) 『バビロンの流れのほとりにて』、二宮正之編『森有正エッセー集成』1、10 頁。傍点原文、下線不破。 50) 清水 (1975 年)、46～47 頁。
- 51) 関屋綾子 (1981) 『一本の樫の木—淀橋の家の人々—』日本基督教団出版局、256 頁。
- 52) 同上書、146 頁。
- 53) 園田英弘 (1993) 『西洋化の構造—黒船・武士・国家—』思文閣出版、266 頁。
- 54) ヴェーバーの「世俗内禁欲」の人間類型を森有礼に適應させた者には、他に長谷川精一がいる。(長谷川精一 (1999) 「森有礼の『新生社』体験」『日本教育史研究』36、35～59 頁)。
- 55) 安田 (1993)、334 頁。 56) 大久保 (1998)、第 3 巻、311 頁。